

# 難波西鶴

# 海の道

【94】

森田 雅也

西鶴の時代に限らず、海の道を用いるようになったのはるか古代から、瀬戸内海航路は日本人の生命線でした。当然、海浜部の港は整備されますし、山間部は積み出し港へのアクセスを探ります。多くは川運を整備

を助めていた旧家の子孫が、江戸時代から今日も京都祇園と交遊があることを教えて下さいました。当然、難波に住む西鶴も、今日の我々の交通網からは意外な地域の人々と親しく交遊していたと考えられます。それは「海の道」を利用して

ましたので、意外な地域同士の交遊が存在しました。先日も島根津和野で調査していると、藩の御用商人

四鶴の『男色大鑑』「貞享4(1687)年刊」巻七の「女方も為なる土佐日記」には、「土佐日記」を模した瀬戸内海の船路風

景の描写が出てきます。それは5日に道頓堀を発ち、「明くれば、六日の朝風、いかりをあげてとり掛の音、磯つたひを打つ……」と「尼崎」「鳴尾(西宮)」「広田のやしろ(西宮)」「和田の御崎(神戸)」「武庫山(神戸六甲山)」を通り、兵庫の港に上陸。7日は須磨、塩屋の沖をゆき、遠く明石の人丸社を拝み、8、9日と過ぎ、10日は唐琴(倉敷)、虫明の瀬戸(岡山邑久)をこえ、11日には柄の浦(広島福山)に入港。12日は風早の浦(広島と愛媛説あり)、さらに土佐に着くという話です。いくら戯作でもうそは書けないでしょう。この海路

## 知識を駆使し読者魅了

の行程は、実際の4月の瀬戸内海航路のものでなくてはなりません。それゆえ同時代の読者も納得しながら読めたはずで

西鶴には「一目玉鉾」(元禄2(1689)年刊)という沿岸地誌ともいえるべき作品があったことは既に述べました。

西鶴こそ海の道を熟知していた作家であり、その知識を駆使して読者を獲得できた作家といえるのではないのでしょうか。また、その地域の産物についても詳しいのですが、それは別稿にて、いずれまた。

(関西学院大文学部文学言語学科教授)

# 熟知した作家の説得力